

一年間を振り返ってみて

活動先：ひいらぎ養護学校、わっぱ作業所

私は特別支援学校の教員になりたいと思っている。そのため、今回のフィールドワークでは肢体不自由の養護学校であるひいらぎ養護学校と、知的障害のある方が働いているわっぱ作業所の見学をさせていただいた。わっぱ作業所では見学だけでなく、半日一緒に作業をやらせてもらい、その後職員さんの話を聞いた。

ひいらぎ養護学校は愛知県で一番新しく出来た肢体不自由の特別支援学校で校内は広く、バリアフリーが完備されていた。校内を見て回るだけでも、普通科の学校とは建物の構造がまるで違った。ひいらぎ養護学校は生徒 128 人に対して教員が 108 名いる。これでも教員の数が多いわけではない。クラスは一クラス 6 人で重複障害を持つ子ども一クラス 3 人という少人数制である。同じ学校であっても普通科の学校とは授業内容や仕組みがまるで違った。単元は一人ひとりの障害に合わせたものになっており、中には遊びの単元などという普通科では考えられないものもある。バリアフリーも充実しており、広い廊下や段差の低い階段など、人身事故や移動のしやすさを考慮されている様々な工夫がなされていた。実際に養護学校を見学し、説明を受けて養護学校のことを少しは理解できたと思う。しかし普通科の学校との違いに、これから日本が障害者と健常児が共に学ぶということが出来ないと感じた。私は特別支援学校の教員になりたいと思っているが、今の日本の障害に対する理解の低さは問題だと思っている。日本の障害に対する理解の低さの原因は身近に障害を持つ人がいないからだろう。障害児は百人に数人の割合で生まれてくる。しかし、街中で障害者を見ることはほとんどない。障害が重くて外に出られない、日光を浴びられないなど外出出来ない人がいないわけではない。しかし、それはごく少数で、ほとんどの人が外に出て活動出来るはずである。では何故街中で見かけないのか。その原因は日本人の障害に対する偏見と差別意識である。理解出来ないと最初から諦め、自分とは違う、劣っている存在と決め付けているのが現状である。実際に障害は悪いイメージが強い。多くの人が関わらないようにしているだろう。失礼な言い方になるが、臭いものには蓋を、という考えをしているひとは多くいる。これは学校だけの問題ではないが、多くの人が障害に対する正しい知識を持つことが必要である。それにより障害児教育の在り方も大きく変わってくると思う。私自身見学する前はどんぐりの家などの本で読んだ知識しか持っていなくて、養護教員は大変でつらいというイメージがあった。しかし実際にひいらぎ養護学校にいて、教員の方々も生徒も表情がとても生き生きとしており明るかった。見学する前とは大きくイメージが変わり、とてもやりがいのある職業だということが良く分かった。

わっぱ作業所は精神障害のある方と共に働く作業所で、農業や農加工品を作っている。私は半日一緒に農作業をやらせてもらった。わっぱ作業所で働いている方は障害が軽度の方ばかりで、障害を感じることなく接することが出来た。障害者は社会での地位は一般に社会的弱者と呼ばれている。そのため、自分一人では何も出来ない、助けてあげなくては

いけない。というイメージが強い。実際一人で生活することが困難な人もいるが、全ての障害者に当てはまるわけではない。わっぱ作業所では職員と利用者で区別はしていない。職員だろうと利用者だろうと一緒に働く仲間として認識している。そのため、「職員さん」などと呼ばれず、「〇〇さん」というふうにな前で呼び合っている。このように、相手を身近に感じる事が出来る所が、わっぱ作業所の素晴らしい所だと思った。また、わっぱ作業所の方々も皆話し合いながら楽しそうに作業をしていた。

日本では障害者に対するイメージは悪い。また、誤解や偏見も多く、障害への理解は乏しい。私自身障害というものを詳しく理解しきれていないし、偏見があるかもしれない。しかし、今年度ひいらぎ養護学校とわっぱ作業所を訪問してみて、今までのイメージや考えが大きく変わった。障害者に関わる仕事は大変だとは思う。この考えは変わらない。しかし大変でつらいことも多いだろうが、成長を見ることによって大きな喜びとなる。それを肌で体験することが出来る仕事だということが良く分かった。これが私にとってサービスマーケティングを通して一番の学びになったことである。